

## ヒューマンコミュニケーション～伸縮自在のコミュニケーション～ 論文特集の発行にあたって



ヒューマンコミュニケーション～伸縮自在のコミュニケーション～論文特集編集委員会

委員長 武川 直樹

技術の進化は他者との関わりや生活環境との関わりも変えていきます。私たちの生活の利便性を向上させるだけでなく、社会の複雑化、生活の多様化に伴ってマイナスの面を作っていることも忘れてはいけません。ヒューマンコミュニケーショングループでは、このような状況のもと、人が人・社会・環境と相互に関わるコミュニケーションの基礎的研究、開発研究、評価研究を横断的に議論しています。議論の場としては、毎年HCGシンポジウムを開催し、そこで発表された研究を中心としつつ、更に広い分野の研究を「ヒューマンコミュニケーション」論文特集（以下「HC特集」）として発刊し、研究成果を発信してきました。

本年の特集は、「伸縮自在のコミュニケーション」をキーワードに、多様な人々、多様な状況におけるコミュニケーションの分析、解明、モデル化、システム開発、評価に関わる、一般論文、レターを合わせて25編の投稿がありました。厳正な査読を行った結果、一般論文17編を採録しました。これらの論文は、伸縮自在のコミュニケーションを実現するための道を示しているものと考えます。また、本特集にはHCGシンポジウム2016（2016年12月）からの推薦論文3編\*が掲載されています。これら3編の論文は、本論文編集委員会としてDソサイエティへの論文賞候補として推薦されていることを併せて御報告いたします。

さて、今回の論文特集の編集にあたっては、委員が複数年にわたり担当する、常設化編集委員会体制を構築しました。編集委員会の常設化により、HC特集として新たに開拓する分野、査読の方針などを戦略的、継続的に議論する場ができました。今回は、その初年度として編集委員間で、多様で活発な意見を交わしま

した。次年度に向けては、工学、心理学、社会学、文化人類学、言語学など広いコミュニティのHCGへの取り込みと融合を図り、HCGにふさわしいクオリティとオリジナリティの高い論文特集となるように努力したいと考えています。HC特集とHCGシンポジウムが国内のHC研究及び関連研究の中核的コミュニティへと発展するための基盤を構築したいと思います。

なお、本特集は多くの方々の御尽力により成立しました。本特集に御投稿頂いた方々、査読、編集に取り組んで頂いた編集委員及び査読委員の皆さま、電子情報通信学会事務局の和文論文誌担当江藤さまに感謝いたします。編集副委員長の小森政嗣先生、編集幹事の高梨克也先生、竹内勇剛先生、近藤一晃先生には、限られた時間の中で丁寧で公正な編集作業を進めて頂きました。多大な御尽力を頂いたことに深く御礼申し上げます。

\*論文名

- 「電気刺激による空中での物体接触感と硬さの提示」
- 「複数人による双方向の対面行動を計量するウェアラブルデバイス」
- 「ASD児を対象とする対人距離の時間変化モデルとその応用」

武川 直樹（正員：フェロー） 1974年早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。同年日本電信電話公社（現NTT）入社。NTTデータ、NTTコミュニケーション科学基礎研究所を経て、2003年より東京電機大学。画像符号化、画像処理、画像認識、ヒューマンインタフェース、ヒューマンコミュニケーションの研究に従事。2012年本会ヒューマンコミュニケーショングループ運営委員長。IEEE、ACM、情報処理学会、人工知能学会、日本認知科学会、日本顔学会各会員。

